

氏 名 西 田 嗣 夫  
所属学校 奈良県立耳成高等学校  
担当教科 英 語



### 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) マレーシアとシンガポールでは何語が使われ、英語が実際どの位の割合で話されているか、を知りたかった。
- (2) 日本政府及び他の諸団体が両国に資金及び技術援助を行っているが、学校（今回は大学）に対して何をどの様に援助しているかを知り、我が国の学校との比較を試みたかった（教育や技術水準を含めて）。

### 2. 国際協力の現場で

#### (1) 参考になったこと

かなり多くの地域（特にマレーシア）で、日本政府が協力、援助をしていると現地人達も喜んで援助を受け入れ、日本に対して多くの期待をしていること。彼らと日本人（特に隊員、職員）とのコミュニケーションも大体うまくいっていることがわかりました。

#### (2) 気になったこと

植林事業で、せっかく植えた苗木が大きくなり過ぎて移植できなくなり、大きくなった木がほったらかしにされている所が2、3あって気になりました。またマレーシアの農林地域では雨が少ない時、水不足に悩まされるようなので、困難な面が多いと思いますが、今後山に貯水ダム等の建設に援助して、この事業の遂行に努力して頂きたいと思います。

### 3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

マレーシア農科大学バイオ・テクノロジー学科拡充プロジェクト——将来この研究が、豊富なマレーシアの農作物を一層改良し、質の良い品を多く日本が受け入れることができるよう研究していること。

シンガポールでの日・シAI（人工知能）センタープロジェクト——東南アジア諸国の中でも最も進んだ科学プロジェクトの一つで日・シ両国が力を合わ

せ科学コンピュータの益々発展しつつあることを紹介したい。

#### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

シンガポールではどこへ行ってもごみが落ちてなく、とてもきれいで清潔な感じがした。これはタバコの吹い殻やチューインガム、その他のごみを公共の場に捨てた場合かなりの罰金を払わねばならないことに起因しているようで、日本もこのような方式を取ればよいと思います。現在ではそのような法律は我が国にないので、各自が自覚し、他人がしていれば注意する勇気を出すようみんなが若者に教育すればよいと思います。(学校及び家庭教育で)

言語に関してマレーシアではマレー語が国語で、地方や人種によって中国語やヒンズー語等が話されているようですが、多くの者は人種等が違えば公共語の英語で話すようで、若者達が話す英語は我々日本人にはわかり難い英語で下手であるが、どんどん単語を使ってコミュニケーションしてくるのに感心させられた。日本の若者達にも書き、読みの英語だけでなく、もっと積極的に話せるよう指導しなければならないと痛感しました。

#### 5. 所感および意見

##### (1) 研修時期および期間

今回は8月末に実施され、帰国後すぐ2学期の学習が始まり、文化祭が行われる忙しい時期であったので休息する間がありませんでした。今後、できれば8月上旬か3月20日頃の出発であれば良いだろうと考えます。

##### (2) 研修日程および訪問先

日程に関しては大体良かったと思いますが、欲を言えばクアラルンプールでの4泊のうち1泊を東マレーシアの西部かマレー半島の北部で、そしてあと1泊をシンガポール(計2泊)であれば理想的であったと思います。

訪問先に関しては全て内容の違う事業を見学することができ、どの訪問先も日本人の方々が親切に案内や説明をして頂き、準備もしていただいております。現地の方々にも協力して頂き本当に楽しく研修することができました。

##### (3) その他全般的な所感

9日間という限られた期間内では研修や観光が豊富に計画、準備されており、各事業所や事務所の関係者、現地の方々の御指導、御協力に心から感謝

申し上げます。私達は各学校で両国のPRに努め、日本との関係が更に良くなり発展するように期待します。国内の関係者にも御礼申し上げます。ありがとうございました。

(3) 南米班(ブラジル・パラグアイ)日程

年月日	日 程		宿泊(ホテル名等)
	午 前	午 後	
08.21(金)		19:00 東京発	
08.22(土)	12:15 アスンシオン着	16:00 日程打合せ、概況説明 市内見学	ホテル・ウチャマダ
08.23(日)	10:00 近郊農家視察	近郊農家視察 協力隊員との懇談会	同 上
08.24(月)	08:30 JICA事務所 09:30 シャーガス病研究プロ ジェクト視察 10:30 日本語学校視察	14:00 アスンシオン大学・協 力隊員活動視察 15:30 国立工業高校・協力隊 員活動視察 16:30 人造りセンター視察	同 上
08.25(火)	10:00 ラ・コルメナ移住地着 無償プロジェクト(灌 漑、上水道施設)、農 協・果樹栽培農家等視 察	ミナスクエ(旧製鉄所) 見学	同 上
08.26(水)	07:30 エステ市へ 09:00 プラスカライ・プロジ ェクト現場視察	12:30 イグアス移住地着 15:00 イグアス事務所 16:10 パラグアイ農業総合試 験場視察 17:00 移住地内視察	ホテル・フクオカ
08.27(木)	09:00 イタイプ・ダム見学 ブラジル入国	13:15 三国国境地点見学 14:00 イグアス滝見学 18:45 サンパウロ着	フジ・バラセ・ホテ ル
08.28(金)	09:40 サンパウロ食料供給セ ンター視察 10:30 サンパウロ総合大学視 察 11:20 プタンタン毒蛇研究所 視察	14:15 JICAサンパウロ事務 所 14:45 移民資料館視察 15:45 市内見学	同 上
08.29(土)	09:00 日伯友好病院見学 10:00 荒木花卉園見学 リオ街道工業団地視察	21:45 グアルーリョス空港発	
08.30(日)			
08.31(月)		13:30 東京着	

氏名 本田 富夫  
所属学校 徳島県立穴喰商業高等学校  
担当教科 商業



## 1. 視察等に際して特に主眼を置いた点

### 1) 日系移住者の近況

### 2) JICAの海外での活動状況、他に青年海外協力隊の活動について

私たちの日常生活の中で南米は遠い国である。徳島においても南米といえばブラジルであり、リオのサンバとの相互親善訪問、さらには徳島市とサンパウロの姉妹都市提携にもとづく活動といった程度のものである。それほど私たちは南米を意識することはなかった。

ところが、近年における国際的な問題として、日本への出稼ぎがクローズアップされた。中でも移住者の方々の出稼ぎがマスコミで取り上げられるようになってきた。徳島においても、サンパウロに県人会があり、多くの方が移住したと聞いている。移住後の活動と現況を自分なりに視察したいと思った。また、海外移住の支援としてのJICAの活動、とりわけ青年海外協力隊の現況も知りたいと思った。

## 2. 国際協力の現場で、参考になったこと、気になったこと

活動している方々の努力と苦労は、われわれの日常生活では考えられないことである。彼らを動かしている情熱は、現代の高校生のはほとんどは持っていない。少なくとも表面的にはそう映る。もちろん大人もそうである。彼らの理屈抜きの行動が国際協力の根幹であると痛感させられた。

施設・学校を数ヶ所視察した際、最終的に訴えられたのは「資金援助」であった。確かにパラグアイは貧しく、教育施設・設備も不十分である。彼らの日本への期待は、まずお金であるということも現実としてはよく分かる。日本の援助のあり方が国際的に問われている今日、複雑な気持ちで「資金援助」の要請を聞いた。

### 3. わが国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

「資金援助」の要請がある一方、資金・物資の横流し、横領等の事実・現実を目の当たりにした。(各施設の担当者からの説明の中で、また、アスンシオンからのイグアスへ移動の途中、国際道路の舗装費用の一部が消えたため、上下一車線のための舗装となっている現実)このような現実を見る度に「国造りは人造り」であると痛切に感じた。その意味で「人造りセンター」の果たす役割を大いに期待したい。

### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

今回の南米派遣チームは私費参加の校長OBを含め4名であった。このチームの特徴は全員が真剣であったことである。また事前に連絡を取り合い、視察の携帯用具の分担等も話し合った。このことは最後までチームワークの良さとして生きてきた。お互いの研修内容を交換し役立てることを考えている。具体的には

- (1) 写真の交換
  - (2) ビデオの編集、ダビング、配布(参加者への)
  - (3) インタビュー等の内容、メモのまとめ、配布(参加者への)
- 等を考えている。

私の場合は現在までに下記の2項目を実行した。

- (1) 9月5日(土) 全校生徒に対する報告会として60分の講演を行った。
- (2) 徳島新聞社への紀行文の寄稿——9月中に3回掲載予定。

今後の予定

- (1) 徳島県商業教育協会機関誌への掲載。
- (2) 文化祭における写真の展示、ビデオの上映
- (3) 社会科担当教師への資料提供
- (4) 補欠授業を利用した講話

上記のことを通じて今回の私の研修成果を一人でも多くの方々にお分けしたい。

## 5. 所感および意見

- (1) 研修時期および期間
- (2) 研修日程および訪問先
- (3) その他全般的な所感

(1)については現状でやむを得ない

長期に研修日程を確保しようとするれば夏期休業中が都合がよい。

(2) J I C A各事業所の方々の厚意により、充実した研修日程、訪問先を組んでいただき大変勉強になった。

今回の研修は、私にとって初めての海外旅行であった。たまたま今年度より進路指導主事を任命された。8月は進路指導の最盛期であり、しかも8月20日より出発であったため、日曜返上での勤務であった。3学年担任、進路指導課員の好意で南米に行かせていただいた。私にとっては学校の看板を背負っての研修であった。この研修を通じてたくさんの方と知り合い、J I C Aの諸活動を目の当たりにし、さらには移住者の現況も少しは理解できた。何よりも、国際協力の最前線の視察を通じ国際協力の在り方を考える「時間」をもてたのは幸いであった。

この研修に参加する機会をいただいたJ I C Aに感謝を申し上げます。今後、この研修の成果をあらゆる機会に還元したいと考えている。

氏 名 川 西 輝 道  
所属学校 高知県立須崎工業高等学校  
担当教科 工業（電気）



## はじめに

今回の研修旅行につきましては、貴事業団の格段のお計らいによりましてパラグアイ、ブラジル JICA 事務所 所長様はじめ職員の皆様には大変お世話になり、頭書の研修を深め無事予定通り帰国できましたこととお礼かたがた報告申し上げます。

ブラジル、サン・パウロ JICA 事務所の皆様には御多忙のおり他の行事と重なる中、私たちの研修に御配慮を下さりありがとうございました。両事務所では懇親会など交流の場を多々もうけて下さりまして、心から厚くお礼申し上げます。

## 1. 視察に際して私が主眼をおいていた点について

本研修会に応募した動機について、先ず述べたいと思います。

私は昨年末から本年初めにかけてインドへ3週間、インド人の友人を日本から伴い9名の仲間で、インド各地の不可触民（アウトカースト）と呼ばれる人人の生活を体験してきた。彼らはヒन्दゥー教のもとでの身分差別から、仏教徒に改宗してあえてリザーブシステム（特別施策）による優遇策を捨ててまで改宗した元不可触民の人々の生活、宗教観などをホームステイするなかで深めることができた。この旅行で彼らが教育にかける情熱と、高学歴を積んでも十分な仕事保証がないことなどを見聞してきた。

今回、南米についてマスコミより得ていた私の知識では、特にブラジルでは債務超過国でインフレがひどく、日系ブラジル人が生活に困り日本へ出稼ぎに来ている。あるいはブラジルの生活に見切りをつけ帰国しているという状態であるという印象を私はもっていた。

私が知っている戦後のブラジル、パラグアイ移民が多くでた頃は、日本では東京オリンピック前、すなわち日本が高度経済に移行していく前、より大規模な農業を求めて南米への移住が盛んであったように記憶している。

そのようなわけで、南米各国の実情、移住地の状態、日本政府のかかわり方



などに興味をもって今回参加しました。

## 2. 研修時期および期間、訪問国

- 8月21日 成田出発 リオ・デ・ジャネイロ経由
- 8月22日 パラグアイ、アスンシオン着  
日程打ち合わせ、市内見物
- 23日 アスンシオン、前原農場（養鶏）、青年海外協力隊員との懇談会食
- 24日 JICA事務所訪問、シャーガス病研究プロジェクト視察、無償援助で建設した人づくりセンター視察、国立工業高校視察
- 25日 日本人学校、ラ・コルメナ移住地、農協無償プロジェクト（灌漑、上水道施設）視察
- 26日 エステ市 プラスカライプロジェクト現場視察（青年海外協力隊員による試験プロジェクト）イグアス移住地、パ農総試、移住地農地視察
- 27日 イタイプ ダム水力発電所見学、イグアスの滝見物、ブラジル、サン・パウロ市へ移動
- 28日 サン・パウロ市 サン・パウロ食料供給センター、サン・パウロ総合大学キャンパス、ブタントン毒蛇研究所視察、JICAサン・パウロ事務所訪問、移民資料館、懇談会
- 29日 日伯友好病院見学、荒木蘭園見学、グワルーリョス空港  
帰国
- 31日 成田

## 3. 国際協力の現場で

### (1) 青年海外協力隊員の活動と懇談を通じて

アスンシオン市人づくりセンターで日本語教育、地域生活改善指導、SEGA自動車整備、国立工業学校での授業協力などを見学し、隊員たちと懇談の場をもつことができた。

パラグアイは人口416万人、その内、日系人が7700人であるが、JICA

Aの海外事務所の中では規模が一番大きいと聞いた。(イグアス移住地へ行ってわかったが、これには戦後農業移住を移住地を整備して分譲した事業のためだと思う)

パラグアイ人はスペイン系住民で、インディオとの混血を除いて他の民族はそれほどおらず、どこかヨーロッパを思わせる雰囲気がある。そのため比較的治安が良いようである。

そのような土地柄であるのと、これまで日本の行ってきた移民政策、日系人が土地を開拓しパラグアイ国に貢献してきた一世の努力によりしっかり現地人の中に信頼関係ができていることを、隊員との懇談会の場や移住地を訪問して感じた。

プラスカライプロジェクト現場で活躍する青年海外協力隊員には頭が下がった。また、このプロジェクトが比較的細かい現地農民の生活向上のため、彼らは栽培技術から品種改良などに携わっていた。しかもその生活環境は電気もなくランプで、土間にベッドを置いた粗末な小屋に住んでいた。下宿先が狭いので寝泊りはここでしているが食事は下宿先でしているということであった。

私も長年高校の教師をしているので、最近の若い人たちが俗にいう3Kを厭うなかで、このような生活に入って目的遂行のため、ただ耐えるのではなく明日に希望をもって頑張っている姿に打たれた。

都市での彼らの活動やこのような農村での活動が彼ら自身の素晴らしい体験になるのはもちろん、現地住民の心をとらえることがこれからの国際協力ではないだろうか。

国立工業学校を視察して、私が工業高校で電気を教えているのであえて、ここを見せてもらえたかも知れないが、授業内容は日本と同じかやや即戦的な職業訓練センターの授業形態であると思った。しかし、先端技術であるLSIなど最新技術に担当教授が興味を持っており、国外へ購入に出掛けているということであった。

発展途上国に共通して言えることは、生活環境を整備し教育を高めることが一番必要なことであるが、教育はその国々が独自にすることであり、他国が直接に関与することはないけれども、そのあたりを如何に啓発していくかが重要なことだと思うし、彼ら青年海外協力隊に負うところが大きいと思う。

(2) シャーガス病研究プロジェクトの視察をして

この研究所所長が秋田大学医学部教授を退官してここで研究に携わっているということにまず驚いた。人的派遣も必要なことであるが、JICAが最新機械器具を送り込んでいることにも地域医療に貢献する姿勢の表われと思った。

日本では、このような発展途上国での地味な取り組みがマスコミを通じて報道されることが少ない。欧米先進国の出来事は良く報道されて関心をもっているが、JICAとして報道されるときは、コロンビアで、ネパールでと悲しい事件のみで、一般日本人はJICA観を危険な地域で仕事をしている団体としか受け止めていないのではないかと思う。こうした日本的マスコミのニュースバリュウのとらえ方、南北問題のとらえ方、日本人の人種による差別観、貧しい国々に対する嫌悪感、このような個人の感覚による価値観の違いなどを日頃職場で、このような地域への「旅行」について話す際にしばしば感じることもある。

(3) 日本人学校、ラ・コルメナ移住地、無償プロジェクト(灌漑、上水道施設)、前原農場を視察して

日本人学校、私が高知県出身であるので高知県人会の寮に案内された。

日系人のための日本人学校は、かつて日本の教育がそうであったように教科書と黒板チョークの授業であると感じた。基本的にはそれで足りるかもしれないが、急速に変革している世界情勢のなかで、子どもたちの知識のずれを視聴覚教材を導入することではかってゆき、パソコンなどの授業も取り入れて生徒ひとりひとりの個性を伸ばすためJICAの協力があってもよいのではないかと思った。(我が国では学校現場に教育機器が導入され成果をあげている)

灌漑、上水道施設の視察とコルメナ移住地の農協などを視察して日本の経済力を知った。現地人が多く住んでいる移住地でJICAが果たしたこのプロジェクトにありがたさを覚えたことだと思う。農協の方々と懇談したときにもその気持ちでいっぱいだと感じた。

大規模に養鶏業を営んでいる前原農場を視察して、20万羽養鶏の経営才覚について、これはブラジルでもいえることだと思うが、市場のニーズに応えながら経営者の立場で規模拡大、経済効率等に優れたものがあり、成功者に

はそれなりの経営才覚が必要であると痛感した。

(4) イグアス移住地を視察して

日本人の農地と現地人の農地の違いはすぐわかるほど、日本人の農地は広大な土地を無駄なく耕作していた。

私はこの移住地については、昭和34～35年ごろだと思うが私が高校生のと  
き、高知県の山間部で当時村長をしていた公文さんが、この地を視察され村  
をあげて移住すると当時地元新聞で報道されていたことを覚えている。今回  
この地を訪れたのでお聞きしたところ、世代が代わって活躍されていると聞  
いた。

高知のこの元村長さんの住んでいた村は現在国道が整備され、当時閉鎖的  
であった村は車社会になったこともあって高知市への通勤圏になって様変り  
した。当時日本の現在の高度成長による様変りについて誰が予想しえただろ  
うか。しかし一方では取り残された村では急速に過疎化が進んでいる。この  
ことは何も高知県に限ったことではなく全国的なことだと思う。

イグアス移住地へ新規に入植して農業をする人がなくなったと説明があっ  
たことに、時代の変遷を知った思いがした。

(5) イタイプ・ダム水力発電所見学

出力1260万KW、四国電力伊方原発の1機の出力が100万KWを考えれば、そ  
の大きさがわかる。この豊富な電力はブラジル側にも供給されているようだ  
が、この国に大電力を消費する産業がないのが寂しい。

(6) サン・パウロ市について

パラグアイのJICA事務所、イグアス事業所で治安の悪さについて強く  
注意するよう忠告を受けたので、この近代的な都市を自分の足で十分確かめ  
ることができなかったのが残念。特に写真をとりたいと思っていた私はブラ  
ジルの写真が少ないのは心残り。

しかしさすが日系人の都市、日本のスポーツ団体や学生やら観光客まで日  
本人街で見かけた。

(7) サン・パウロ食料供給センター、移民資料館などを視察して

食料供給センター当日は花市になっていて、日系人による花の取引も多く  
見ることができた。売られている花は日本でも取引されているような品種が  
多く、変わった種類の花は少なかった。

(8) 荒木蘭園、日伯友好病院を視察して

パラグアイの農業でも述べたが、成功の秘密は経営者努力に尽きると思う。FAXを備え世界市場をにらみ技術的なことを日本の学会から学んでいると話されたが、そのため毎年世界各地を旅行しているといわれた。

ショッキングなことは荒木さん自身三度も、つい最近もhold upされギャングに襲われ金と車を奪われたということであった。われわれ日本人は常に水と安全はただだと思っているからなお更の観がある。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

今回の研修について、これまで高知県では農業科の教員が参加していたが、私が工業科の教員としてはじめて参加したので、要請があれば工業教育研究部会などで報告したいと考えている。

この旅行で撮影したフィルムからビデオテープに起こし、国際協力の実態を青年海外協力隊員の活躍、無償援助プロジェクト、移住地の模様等に編集して映像化を考えている。

来月には製作にかかり貴JICA広報課へ、パラグアイ、ブラジル両JICA事務所にもVTRテープをお送りしたいと考えている。ただし、TVの方式が異なるので変換装置にかけないといけないと思う。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

旅行開始時期を少し早めて、帰国後体調を整えられるように余裕が欲しい。(帰路飛行機がほとんど昼間ばかり飛行するのと、時差が12時間あることは頭でわかっているが体が順応しにくかった)

期間については適当だと思う。

(2) 研修日程および訪問先

パラグアイでの日程、訪問先については当地JICA事務所が細部にわたり気配りして下さり感謝している。

ブラジルについて、治安が悪いので日程を短くしたかもしれないが、折角ブラジル、サン・パウロまで行っているのに、リオ・デ・ジャネイロも訪れなかった。

(3) その他全般的な所感

今回私たち4名で11日間行動を共にしたが、小人数の研修旅行は家族的でとても良かった。

4日間であったがパラグアイの広大な土地、テラ・ロシアの赤い土、人なっこのパラグアイ人。機会があればまた、ぜひ訪れたいと思っています。

最後に今回このような研修の場を与えて下さいました貴JICA事業団広報課、パラグアイ、ブラジル両JICA事務所の皆様に心から深く感謝申し上げます。

氏 名 山 口 一 男  
所属学校 茨城県立猿島高等学校  
担当教科 農 業



## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) J I C Aで行っている援助がどのように現地で生かされているのか。
- (2) 青年海外協力隊員の活動状況の視察。
- (3) 日本人移住者の活動現場を視察し歴史について理解を深める。
- (4) 訪問国の文化・風俗・習慣について理解を深める。

## 2. 国際協力の現場で

### 1) 参考になったこと

- (1) 国際協力事業団の実施している国際協力事業（技術協力事業、青年海外協力隊派遣事業、無償資金協力事業の調査・実施促進業務、開発協力事業、移住事業、災害緊急援助業務）の一部を視察・見学することによって、日本国の国際協力はP K O以外には無いかの如く連日報道されていて、日本の国際協力の必要性は理解していたつもりであったが、パラグアイ、ブラジルを訪問してさまざまところでJ I C Aを通して援助の手が差し伸べられていることを知ることができた。
- (2) 戦前、戦後に日本を離れ新天地を求めて南米に移り、筆舌に尽くしがたい苦勞の末今日に至っている移住者に会い話を聞くことができた。
- (3) ブラジルで花卉栽培農家を訪問し、施設の大きさ、経営方針、問題点について視点が異なることを痛感したこと。
- (4) テラロシアを肌で触り実感できたこと。

### 2) 気になったこと

- (1) ブラジルの経済不振、治安の不安定感
- (2) 生活習慣、価値観の違い
- (3) 日本への2世、3世達の出稼ぎ問題
- (4) イグアス移住地のJ I C A事務所の閉鎖

### 3. 我が国の協力ぶりを各方面で紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

#### (1) シャーガス病等寄生虫症研究プロジェクト

パラグアイ国民の20%余りの人達が感染している病気であるが、原因予防についての基礎的な実験に取り組んでいる。

#### (2) イタイプダム水力発電プロジェクト

パラグアイ、ブラジル両国間を流れる、パラナ河に建設されたダムで、パラグアイで使用している電力をまかない、余剰電力をブラジルに輸出しているもので、パラグアイの発展に貢献している。

#### (3) 青年海外協力隊員の活動について

現地の人々と生活・仕事を共にしながら、それぞれの技術や技能を生かして、地域の社会・経済発展に貢献している姿は内外で紹介すべきである。

今回プラスカライプロジェクトでメロン栽培、カンキツ栽培の研究をしている隊員の生活を見て彼らの努力している様子等。

### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

(1) パラグアイ、ブラジルを自分の目で見てきたことと、知識として持っていたものを、軌道修正すべきところはどこか整理し、国々の生活、風俗習慣、価値観の異なる中での国際理解を深める必要性。

(2) 日本の国を外側から見て、訪問した国との相異はどこか。

- ・治安のよい中での生活に慣れている日本人
- ・弱肉強食の社会ではなく、努力すれば報われる社会
- ・生活する事のみ精力を使わねばならない社会

日本を理解して、日本のおかれている立場を知ることによって、国際理解と国際協力の必要性を知らせる。

(3) 国際理解をする中に外国語教育の果たす役割の大きさについて、自ら痛感してきましたので、語学教育の必要性を唱える。

(4) 写真、ビデオを利用して訪問した国々についての情報や知識を提供し、JICAを中心とした国際協力の実態を知らせる。

(5) 教科の中(農業)で比較しながら興味関心を持たせる、講演会の機会があれば体験したことを伝える。



## 5. 所感および意見

### (1) 研修時期および期間

研修時期は夏休み期間中で良いのですが、出来れば帰国後に、新学期がはじまるまでに2、3日余裕があるとベストです。期間は少し短い気もするが、校務を考えると適当であると思います。

### (2) 研修日程および訪問先

日程は日本の反対側の国にいくのですからハードスケジュールはやむをえないと思います。訪問先に関しては、日本の援助を必要としているので活動状況を視察する所としては適当であると思います。

### (3) その他全般的な所感

パラグアイを重点的に視察したため、様々なところで日本の援助を待つ人達に会い、国際協力の在り方について考えさせられました。

発展途上国に必要なのは、確かに物質も必要であるが、長期的に見た人作りの為の援助が大切ではないかと感じました。教材がないと教育は出来ないといってくる人達がいるが、戦後の日本を考えると物ではなく意気込みがなければ前進しないと思います。子供達に社会のルールを守らせ努力したことが報われる社会を実現する教育の援助の必要を感じた。

移住した人達の日本への出稼ぎの問題は、経済活動の変化に伴う為で、世界的に見れば食糧問題は解決していないが、農業生産者の生活は豊かにならない為、農業よりも収入の多い出稼ぎへいってしまうのではないか。出稼ぎをした若者の話によると、日本に5年間きて1200万円残して帰国して、家を建てて農地80haを購入しているとの話を聞きびっくりした。彼らは仕事で日本にきても永住する気はなく仕事の場所としか考えていないことを我々日本人は考えねばならないだろう。

日本人が外国で体験する国際性のない自分自身を知り変わろうと努力するが時間が短く変わり切れない、その時日本に帰ればつい考えてしまう、この考え方が国際性を失わせているのではないだろうか。人間は一人では生きていけない助け合ってこそ素晴らしい人生になることを知ることが国際理解の一步ではないかと考えております。このような機会を与えていただきましたJICAの関係者皆様にお礼申し上げます。今後の教育現場で研修したことを活用し国際理解に役立つように努力致します。ありがとうございました。

平成4年度(第28次)高校教師海外研修報告書

---

平成4年12月1日発行

発行者 国際協力事業団

〒163-04

東京都新宿区西新宿2丁目1番1号

新宿三井ビル 私書箱216号

電話 03-3346-5311

---

©1992 国際協力事業団

Printed in Japan





